

「評価されない彼女たち」の恋愛

——フィールド調査の視点から——

文筆家 鈴木涼美

1 目的

本報告は主に、働く女性目線での恋愛のあり方に焦点を当てる。企業や官庁で自分たちと同じ条件で働く女性、という属性は、女性を恋愛対象とする者にとって新しい存在になって間もないからだ。近年、「女性の生きづらさ」に言及した記事や書籍が注目されるようになった。女性の働き方が変化している中で、未だ男性社会の習慣が色濃く残る企業や家庭の中で不満や困難を抱えている女性が多いことにはうなづけるが、本報告では「生きづらさ」と呼んでいる状態の中にあるのが、単に「男性と同じ権利を享受できない」「女であるという理由で不当な役割を押し付けられる」といういわゆる性差別に起因するものだけではなく、新しい存在である自分たちについて、自分らも世の中も扱い方が未だ定まっていないことが原因にあると仮定する。その仮定を恋愛における困難から読み解くとともに、彼女たちの登場によって恋愛がどのような変化を遂げているのか、解説することを主たる目的とする。

2 方法

報告において使用するデータは、報告者が過去数年に渡って執筆活動のために使用してきた、主に30歳前後から40歳までの女性同士の会話とする。一部のインタビューを除いて、友人もしくは同僚同士の送り合ったテキストや会話の聞き書きを主な資料とした上で、その中から、恋愛に関するもの、付随して結婚や職場の異性との関係に関するものをまとめ、報告の主幹とする。彼女たちが成長過程で触れてきた文化や母親や教師などの世代が直面しなかった問題が何であるのか、を会話の中から見定めた上で、それが彼女たちの恋愛とどう絡み合っているのかを紐解く。

3 構成

代表的な発言や会話で使用されるキーワードを抽出した上で、彼女たちの「新しい悩み」として以下の5点に注目して報告する。その上で、恋愛においてどういった状況を引き起こしているのか、それらが解消される、とはどういった事態であると考えられるのか、に論を繋げることとする。

- ① <男の好み・モテ>恋愛において評価される要素が社会的に推奨される女性像とかけ離れている
- ② <多様性の功罪>何に重きを置いて生きるかを選択する機会がなかった
- ③ <自立の功罪>恋愛していなくても生活が成立してしまう
- ④ <女性の身体>出産可能年齢だけは時代に合わせて変化してくれない
- ⑤ <恋愛の理想>刷り込まれた恋愛の形と離れると不安になる

4 新たな問い

報告では女性が男性に比べて、仕事と恋愛を切り離して考えざるを得ない状況にあることを指摘した上で、彼女たちの関心が恋愛やその先にある結婚に向いていない訳ではないことを確認した。その上で、働く彼女たちの恋愛事情が、女性のライフコース選択の問題と高度に絡まり合っていること、それではどのようなライフコースおよびその選択方法があるのかを新たな問いとして設定したい。